

【研究ノート】

7本の掌編小説

増 田 辰 良

研究ノート

7本の掌編小説

増田辰良

目次

1. はじめに
2. 大きな勘違い
虫遊戯の話
3. 父母への懇談会
4. これを読んで、感想をくれないか
5. 高価たかひかつくから
斯業いざやう経験
6. とんまな話
7. とんまな話

はじめに

文体とはなにか。これはやっかいな問いかけです。一般的には、書き手の文章表現に見られる個性と言われることがあります。小説であれば、掌編(短編)、長編に関わらず、どこで改行するのか、どこに句読点を打つのか、どんな言葉を選ぶのか、によって文章そのものに生まれるリズムの違い、これら総体を文体といいます。なので、他人が真似のできないような、その書き手の独自の文章作成技法と理解してもよい。書かれる内容によっても、この文体は変えることができます。また、同じ文章を縦書きにするのか、横書きにするのかによって

も、読み易さや受ける印象は違ってきます。文体は不思議です。(文体そのものへの考察は別稿に譲るとして)具体的に、掌編小説を書いてみました。

短編小説の字数が原稿用紙三十枚程度ならば、掌編小説はそれよりもさらに短い。この短い文章でモチーフを伝える難儀さは俳句、川柳や短歌と似ています。

人間の共感力や感情が生まれてからの経験や教育で養われるのと同様に、小説を書いてモチーフを伝えたり、読んでモチーフを理解するには基礎体力(書くこと、読むことの訓練)がいるし、想像力(咀嚼力)を身に付けなければなりません。まず、想像することが大事です。理解や知識はその後から補うことができます。

書くという行為には、思いやモチーフを言葉にしてまとめること、それを伝えること、それによって精神の癒しを得ることなど幾つかの動機があります。その際、頭の中で文章を創造し、それに適切な言葉や表現を想像し、選び取っています。書くことは想像力を要します。

読むという行為は、たとえ違っていても「この小説のモチーフはこうだろうな」という想像力を要します。この想像力を鍛えるこ

キーワード：掌編小説、創作、文体

とは生きる（例えば、詐欺師の文面を読み解く）力にもなります。

ですから、書くことと読むことは想像力を要する行為であるとともに、想像力を鍛える行為でもあります。生きていくうえで、書くことと読むことは必修科目ではなく、選択科目として理解することは正しいことでしょう。しかし、この世の中が言葉で構成されている限り、この言葉にかかわる（書く、読む）能力を高めたい手はない、ですよね。

書いたり、読んで身に付く想像力は自分だけのものですから、閉じたドアを押し開き未知なる世界へ足を一歩踏み出す勇気の源泉（発火点）にもなりません。

掌編小説は短いゆえに、モチーフを伝えるための幾つかの工夫が要求されます。

一つ目はストーリーの現実性。これは私小説風の内容で足りません。二つ目は文章力。ようするに意味の通じる文章であること。それに何かプラスアルファのような表現力があれば、なおいい。三つ目はストーリー性。誰かに読んでもらうわけですから、まず、おもしろいことが大切。しかし、このおもしろいということは人によって評価が違います。あえて言えば、ストーリーそのものが何かを訴えている、訴えるように書くということ。何気ないストーリーのなかに人の情感に触れる（共感し合える）工夫をするということです。

これらを充たす文章を創るには習作と、それへの批評を受けることを繰り返すしかありません。

「書くことは心のドアを開くこと」

「読書とは想像を楽しむこと」

(11)

参考文献。読書や言葉については、拙稿（二〇二二）「言葉の探求 ショート・チャット的笑劇場 ②」「北星論集」第六一卷第一号、一〇〇〜一三六頁所収の「プロログ」を参照。ステイヴン・ミルハウザー（柴田元幸訳）（二〇二〇）「短篇小説の野心」「ホーム・ラン」一九七〜二〇〇頁所収は長編との対比で、短篇小説を褒めちぎっている。

1. 大きな勘違い

十六時四十分ごろ、俺は札幌駅の待合室で函館行きの特急列車を待っていた。発車まで、一時間ほど余裕があった。設置された大型のTVには今日のニュースが特番で放映されていた。

『史上最悪の爆破事件。逃走した犯人を追う』

東京都千代田区の公園で自動車を五台爆破した事件があったようだ。犯人は判明したが逃走しているもよう。その顔写真が画面一杯に写されている。その画面に俺の眼玉は釘付けになった。それはまさに俺だったからだ。この世の中には三人、自分と似た人間がいる、と言われるが……。犯人は俺と同じ帽子を被り、眼鏡をかけ、ウインドブレーカーを着ていた。どこでも手に入る代物である。俺は慌てた。心臓が早鐘を打ち始めた。

隣に座る若い女性は、俺と画面とを交互に見ては訝るような表情をしている。ヤバイ、そんな眼で見るな。俺は立ち上がり、逃げるようにトイレへと向った。俺と擦れ違う人はみんなジロジロと好奇な眼をしていた。私服警察官ふうの男たちもウロウロしている。駅員も誰かを探すような視線でウロついている。ヤバイ、俺じゃないって。

慌てて駆け込んだ拍子に、俺は濡れた床に滑ってころんだ。

「クソ！ イテテ、クソ！」

眼鏡が落ちて、左のレンズにひびが入った。クソ！ 先月、新調したばかりだぞ。

個室に飛び込み、ウインドブレーカーを脱いで、便座に座り、バッグにしまった。動揺は治まりそうにない。震える指先でスマホのネットを操作した。赤字のタイトルが目飛び込んできた。

『犯人は北へ逃げたもよう。函館方面か？』

何だ！ ヤバイ！ 俺じゃないって！

「コン、コン、コン」

誰だ。ノックするヤツは？ クソ！

俺は絶叫した。

「入ってますよー!!」

その声は妙に裏返っていた。クソ！

俺じゃない、俺じゃない。俺は呪文のように唱えながら、首を垂れたままトイレを出て、再び、待合室へ戻った。さっきの女性は駅員と何やら楽しそうにしゃべっていた。駅員は手帳のようなものを出して、何かを説明している。TVでは、まだ特番が放映されていた。そのとき、テロップとともにアナウンサーが叫んだ。

「犯人はトイレで逮捕されました！」

いや、トイレじゃなくて都内だった。何を聴き違ひしてんだよお！俺は顔を前後左右へきよるきよると回した。俺を見返す者はいなかった。

2. 虫遊戯の話

尾崎一雄の作品に「虫のいろいろ」という短文がある。病床にある者は己の命を屋内で見かける小さな虫の儂い命に似せて、ともすれば

病を悲観しがちである。そんな状況下にある主人公は蠅の行動様式を見抜き、一度だけ眉をぐっとつり上げ額につくった蠅の肢を挟んで生け捕ることに成功した。病人はこの遊戯を家族に手柄のように自慢するが、ゲラゲラと笑うばかりである。主人公の死への過敏すぎるほどの熟考と、この遊戯との落差から一笑を誘う作品である。

本人が真剣であればあるほど、それを見る者、聞く者はおかしみや愚かさを感じることがある。そんなときついつい含み笑いをしてしまう。

そこで、私もこれまでに体験した「虫遊戯の話」をしよう。

☆ カメムシ

二階にある私の書斎の窓は内側から内窓―外窓―網戸という構造になっている。その内窓(スリガラス)になにやら怪しく動くものが影絵となって写っていた。その正体はカメムシであった。凶鑑の写真と見比べると、少し茶色に変じた「エゾアオカメムシ」のようだ。眩しい朝陽に腹を曝し、網戸の内側の上部を右へ進んだり、戻ったり、停まったり、と忙しく動いていた。確か、この種の虫はこうした状況に置かれると、ある法則にそって動くということを読んだことがある。

いま、内窓と外窓(透明ガラス)を広く開けると、網戸と部屋は一体の空間となるため陽を仰がず、この虫に振り向くだけの知恵があれば、確実に部屋の中へ侵入することができる。そうすれば、これからやってくる厳冬をこの部屋で快適に過ごすことができるであろう。このまま網戸にへばりついていれば、遅かれ早かれお陀仏してしまうだろう。

それにしてもどこから入って来たのだろうか。網戸は破れていない

し、すき間もないし、換気口かな。畑仕事をした私の服にくっついて来たかな。いずれにしろ、空気を入れ替えようと内窓・外窓を開けたときに、この部屋から空を目指したがために、この災難に陥ったのであろう。

おや、動きが停まった。

「おいおい、もう観念したのか?」

「こら」と指先で、頭に近い網を弾くと、カメムシは、仕方ない、といった調子でわずかに身じろぎした。

このまま放っておいて、どのくらい持ち堪えるか、観察してやろう。

「カメムシの断食期間は幾日くらいだろうか」

ところが翌朝、内窓を開けるとその姿はどこにもなかった。網戸の隅から隅まで眼を凝らしても見つけられなかった。いったいどうやって逃げたのか。

「これを摩訶不思議というんだな」

その数日後、光を取り入れようと内窓を開けると、網戸の外側にへばりついているものが見えた。これもカメムシであった。先日、発見したムシそのものではなく、その仲間だったかもしれない。丁度、私の眼の高さで静止していた。顔を近づけると、脚が六本と触角が二本あった。相手も私の眼に気づいたようだ。そして体躯の長さほどの距離を上へ動いた。それは何か、「しまった」、というような少し照れたような、こそこそ逃げ出すといったふうな動きだった。

それ以上、特別な考えを巡らせることなく、私は右手の中指を鉤型に曲げ、その爪を親指の腹に付け、次に思い切り中指を伸ばし「ピーン」とカメムシの腹を弾いた。カメムシは羽を広げる余裕すらなく、後方、五十センチほど撥ね飛ばされ、そのまま三メートルほど下の庭へと落ちたであろう。私はバタバタと階段に音を出させて、庭に出た。

(四)

窓の下で膝をつき、顔を玉ジャリや敷石に寄せて、あっちこちと落下物を探した。それはまるで砂場に落としたコンタクトレンズを探すような体勢であった。が、どこにも落ちていなかった。

「おかしいなあ、落ちたはずだけど。不思議だあ」

さらに数日後、朝陽の眩しい内窓にゴミのような点が写っていた。

開けると、網戸の中央にカメムシがへばりついていた。私は弾き飛ばさず、じっくり観察することにした。六本の脚を網にしっかり掛けて、左右の触角をピンと立てたその姿勢には絶対に落ちないぞ、弾き飛ばされないぞ、という意気込みが漲っていた。そのとき、私はこいつとの根気比べは長くなるぞ、と覚悟した。

秋風が吹く頃になってもカメムシはへばりついていた。しかし触角は垂れたままで、指先で腹を突いてみたが、蟬の抜け殻のようだった。その殻が消えたのは激しく秋雨が網戸を打ち続けた後だった、と思う。

☆☆ 蚊

蚊を媒介とした日本脳炎の予防接種が普及した頃、私はまだ小学校の低学年であった。それは渦巻き型の蚊取り線香が発売され始めた頃でもあった。田舎の家屋には、まだ網戸を取り付ける知恵はなかった。夏場の夜には蚊帳を吊っていた。涼をとる手段は団扇であおぐか、扇風機を回すか、障子窓を開け放すか、のいずれかしかなかった。夕食後、開け放した障子窓からは色んな夏の虫が蛍光灯へ体当たりしてきた。カナブン、運が良ければ雄のカブトムシ。「ギーツ!」と啼いてセミが飛び込んでくることもあった。が、もっともおおじやまな虫は蚊であった。

ある夜、私は身を犠牲にしつつ蚊を退治する方法を偶然、会得した。それはこうだ。横向きに寝転がり、肘枕をして、テレビでプロ野球を観戦していると、足元から「ブーン」と飛んできた蚊は半袖ランニング(下着)姿の左肘あたりに難なく停まり、心地よく血を吸い始めた。私は肘に痒みを感じ、無意識に「ぎゅっ」と左腕に力を込め、体を起こした。見ると一瞬、蚊は針を刺したままホバリングをし、打ち下ろした私の右手の掌を避かし、戸外の暗闇へと消えていった。その飛ぶ姿はいかにも腹が重いというように低空飛行であった。

「ホバリングしてたな。クソー」

次に、私は胡坐をかいて、「ブーン」が聞こえると左腕を水平に構えてみた。蚊は躊躇うことなく、二の腕に停まり、血を吸い始めた。ちようど、よい頃合いを見計らって、私は「ぎゅっぎゅっ」と瘤が出るほど力を集中させた。すると柔らかい筋肉が針を挟みこんだようので、蚊は羽の振幅速度を上げ懸命に針を抜こうともがいた。前肢を突っ張っているようにも見えた。蚊がもがけばもがくほど、私は容赦なく腕に力を込め続けた。数秒後、身の危険を察知したのであろう蚊は針を抜こうと必死にホバリングを始めた。パンパンに張って重そうな腹には吸い取った血の色が薄っすらと滲んで見えた。それから私は不適な笑みを浮かべて、もがき狂う蚊を右手の掌で思い切り「パチーン」と叩き潰した。

「一巻の終わり。ざまあみあがれ！」

左腕には「ペチャンコ」になった蚊と、えも言われぬ血模様が残っていた。もちろん右手の掌にも残った。

「さて、どう葬り去ってやろうか」

開け放たれた障子窓の敷居近くに置かれた渦巻き型の蚊取り線香の煙は垂直にのぼっていた。私はペチャンコを摘み上げ、線香の火先近

くにゆっくりと乗せた。線香の煙はちよつと歪んで流れた。すぐに烈火はジリジリと湿っぽい蚊を焼き尽くし、線香の灰とともに受け皿へ落ちた。私は血染めの腕と掌を鼻紙(ティッシュペーパー)のこと。当時は、こう呼んでいた)で拭き取ってから、痒みを感じる跡を右手の甲で擦った。この刺し跡はしばらく赤く膨らんだままであった。翌日も翌々日の夜も、私はこの実験を試してみた。成功確率は九割以上であった。

「おもしろいからやってごらんよ」と私は友人たちに、この退治法を勧めたのだが、「そうかあ? おもしろそうだねえ?」と口先だけで答えるばかりで、誰からもこの実験の結果報告を受けなかった。

☆☆☆ 蟻

女房は朝一〇時のデパートの開店に合わせて家を出るとき、玄関横の家庭菜園にいる私に声をかけてきた。

「十二時までには帰ってきますが、お昼に間に合わなければ、食事は用意して冷蔵庫に入れてあるので、それを食べて下さいね」

「ああ、分かった。作業はすぐに終るから。玄関の鍵は掛けなくてもいいよ」

私は女房へ顔を向けてそう答えた。それからキュウリ、トマトと茄子の実や幹や葉っぱをじっくりと覗き込んだ。

「どこから湧き出てくるのだ。こいつは。季節を間違えてないか? 色あせて、茶褐色じゃないか」

これは主にニジュウヤホシテントウである。これ以外に、ヒメカメノコテントウ、もちろんナンナホシテントウもいた。

「茄子の葉っぱにあっちこっち穴を開けやがって。茄子はまだ成長し

ているんだぞ。えい、退治してくれるわ。一匹、二匹。あれ、葉の裏にもへばりついている。三匹、四匹。これだけかな？ おくお、幹にも喰らいついている！ このやろう！ 実を喰ってないだろうな？ 五匹かあ。多いなあ」

テントウ虫を指先で摘み掌に受けた。ふと指先を見る。

「何だ？ この黄色いネバネバは」

これはテントウ虫の血液に含まれる嫌な匂いのする体液であり、肢の関節から出して身を守る防御液と呼ばれるものだ。

「えい、えい、忌々しい！ 敷石の上に落とすやれ。おっと受け身をしたな。見たぞ。俺はお前たちを相手に遊んでいられるほど暇人じゃあないんだ。許さん！ 観念しろ！ えい、踏んづけてやる」

まず、靴のつま先で潰して、その足を上げないでそのまま手前へズリ〜イ、と引く。または、つま先を時計回りにズリ〜イと反転させる。このズリ〜イはその日の気分によってズリ〜イ、ズリ〜イと繰り返すこともある。こうして五匹を成敗した。

「後は、実直な蟻ンコがきれいに掃除してくれるだろう」

これらのテントウ虫は、太陽がカンカン照っていた季節にはあまり姿を見かけなかったが、トンボがやって来る季節になると、急に数が増えた。確か、天敵は寄生バチ、寄生ハエ、菌類であるが、そんな優秀な兵士たちはこの畑にはいない。

「清潔すぎるのか、この畑は」

足元では敷石にへばりつけられたお宝を見つけた一匹の蟻が屍の周りを近づいたり、離れたたり、なにかを探るようにウロウロと徘徊していた。次に、蟻はお宝にかぶり付き、懸命に引き剥がそうとした。悪戦苦闘していると、もう一匹助っ人が来た。二匹は動きを停止し、互いの口と口を寄せ合った。同じ巣の仲間かどうかを確認しあっている

(六)

ようだ。あるいは作戦会議をしたのかも知れない。それが終ると、二匹は協力してお宝を剥がし、口に銜えて引きずりながら巣へと運び始めた。

「巣はどこだ」

私はしゃがんでから、蟻の動きに合わせて、ゆっくりゆっくりと足を進めた。どうやら巣は五メートルほど離れた軒下の排水栓の辺りにあるようだ。忙しなく数匹の蟻が巣穴から出たり入ったりしていた。途中、敷石と敷石との間の細い溝に、雑草の森があり、運搬を妨げる場所があった。蟻たちは森の手前でお宝を口から放し、あっちこっちと動き回ってから口と口を互いに寄せ合った。それからまた銜えた。そして森を右へと大きく曲がっていった。

「こんな小さな虫にも知恵があるんだ。感心、感心」

巣に近づくとつれて、続々と蟻たちが出てきた。他の蟻たちも加勢し、お宝を引きずった。そして巣へ運ぶ組と、まだ転がっている屍を目指す組とに分かれた。屍を目指す組の隊列はあたかも敷石の上に一本の黒線を引いたようであった。

どれくらい時間が過ぎたであろうか。すでに四つの屍が巣穴へ運び込まれていた。元の場所に戻ると、残りの屍に無数の蟻が群がり、方向の定まらないままぐるぐる回っていた。それはまるで大群衆の中で立ち往生しているお神輿のようであった。

「多過ぎるんだ。船頭多くして船山に登る」

そう口に出してから、私は木片で蟻の群れを弾き飛ばした。その木片にしがみ付いていた蟻は私の手の甲にまで登ってきた。

「俺はお宝を献上してやったんだぞ。このヤロウ！」

蟻をパシッパシッと払い落とし、足元を見ると、加勢の減った屍はスムーズに運ばれていった。こうして私は最後の屍が巣穴に運び込ま

れるのを見とどけ、安堵に浸っていた。

と突然、背後から声が出た。

「あら、まだ外にいたんですか」

帰宅した女房は、「ただいま」の代わりに訝るような声をかけてきた。

「ああ、早かったね。もう昼か?」

振り返り、どきまぎした声を返した。

「いいえ、もう一時を過ぎてますよ」

女房は呆れたと言いたげな表情をしていた。

「そっ、そうかあ。虫が多くてな」

私は答えにならない答えをとっさに返し、なぜか愛想笑した。

付記。いずれの短文も人間の愚かさから生まれる笑いを描こうとしたものです。

カメムシの頑張り(意気込み)に対抗しようと決心する人間の愚かさ。

誰からも追従実験されない己の血を犠牲にした蚊の退治法の愚かさ。

蚊の動きに見とれて時間を空費する愚かさ。

虫の側にも愚かさはあります。

最初のカメムシは偶然、なんらかの原因で逃げおさせたのでしよう。二匹目は撥ね飛ばされることよって、逃げおせました。不幸にも最後のカメムシは頑張り過ぎました。強情すぎたかもしれませぬ。むしろ撥ね飛ばされていけば、生き延びられたかもしれませぬ。最後のカメムシに愚かさが描かれています。

蚊では尻に掛かってしまった己の思慮の無さ、愚かさも描かれています。

蟻では「船頭多くして船山に登る」の譬えて、加勢が多すぎるときの作業効率の悪さも愚かさとして描かれています。

参考文献

尾崎一雄「虫のいろいろ」松田哲夫編(二〇一五)『おかしな話』あすなろ書房、

一九〇四頁所収。

3. 父母への懇談会

この時代、大学生への過保護ぶりには目を覆いたくなる。まず、学期ごとの学業成績表が父母の元へ送付されてくる。もう一つは学生たちの出身地域ごとに、定期的に父母懇談会を開催する大学もある。この会を開催する大学は確かに増えている。これは学生の成績のみならず、講義への出席状況などを父母へ直接、知らせたり、三年生、四年生であれば就職活動の進め方やその成果などを知らせる面談である。もともと大学側からすると、これらはすべて、当校はお子さんの大学での生活を十分にサポートしていますよ、という姿勢を父母に見せつける機会にもなっている。当校は学生さんたちにとって、面倒見のいい大学ですよ、とアピールしたいのである。

この面談会に出席する父母などいるのか、と訊かれると、いるんです。それも大勢いるんです、と答えざるをえない。大学だけでなく父母も社会も少子高齢社会を支えてくれる若者たちへ奉仕し、同時に彼ら彼女らへの監視の目を強めているのです。

面談に来る父母の中にはお子さんを自慢する親、やけにお子さんの成績を気にされる親、座るとなかなか、立ち上がりたくない親など、多種多様な父母がいらっしやいます。

―― 事務の係りが父母を面談室へ案内します。

事務職員 お待たせしました。Tさん、こちらが担当のM教授です。

―― M教授はさっと立ち上がり、会釈をしてから挨拶をした。

M

こんにちは。はじめまして、教員のMです。よろしく、お願いします。

T

娘が、お世話になってます。どうぞ、よろしゅうお願いします。

M

どうぞ、おかけください。面談時間は約二十分を予定してしますので、よろしく、お願いします。お子さんは私のゼミ生です。よく頑張ってますよ。特別、心配するような問題はないですからね。お母さん、ご出身は関西ですか？

T

はい。関西弁ですぐに分かるでしょ。生まれは大阪です。娘から、先生も関西の方に実家があると聞いておりますが。

M

はい。私は四国の徳島です。しゃべる機会もないので、かなり意識しないと、関西弁も出てきませんけどね。でもイライラして、感情が昂ると出ます。学生を叱るときなんか、ときどき無意識に出ます。こらゝなにしとんや、この君ゝなんてね。純粹の関西弁を北海道で聞くのも久しぶりです。でも、ゼミの時間、お子さんが関西弁をしゃべるのを聞いたことないですね。

T

あの子は一人っ子で、二歳のときに父親を亡くしてから小学二年で札幌へ引っ越してきたので、むこうの言葉はようしゃべらん、と思います。家では、私がガンガンしゃべってますけど。

M

ああ、そうですか。一人っ子には感じませんね。しっかりとしてますよ。

ここまででは、親との距離を縮めるためのイントロである。が突然、

母親は心の中を打ち明けた。

T

……先生、私、友達がいらないんです。えっ？ ああ。言葉の問題でしょ。

M

—— 教員はとっさに合の手を入れた。さすがは（広い意味で）関西人です（二人いれば、漫才になります）。

T

そうですねん。こっちの人は愛想もないし。

—— 教員はすばやく「空気」を読んだ。

M

お母さん、ちよつと説明しておきますね。この成績表はお持ちですよ。

T

はい、これやね。さつき、お弁当をごちそうになったときにもりました。

M

成績や受講態度にはコメントすることはないですから。成績は学部で一番ですからね。ご存知ですよ。成績優秀者がもらえる奨励金をもらってますよね。このままいけば、卒業式に学部の総代として、壇上へ卒業証書を受け取りに上がるかもしれませんよ。立派な成績です。

T

そら大変や。いっちょらいのお洋服を作らんとあかんですね。今から用意しましょか。お金については、そう聞いてますけど、全部、あの子の口座に入ってますねん。私んこは父親がおりませんが、その母親、おばあちゃんがいますねん。今、施設に入ってます。十分なお金もないけん、

M あの子には学費を貸してあるんです。就職したら全部、返
してくれって。でないと、私、食べていかれませんか。先
生、〇〇さんを知っていますか？
えっ？ 誰ですか。知りません。

M 教授は思わず、顔を突き出した。

T ここの大学を卒業して、おばあちゃんの入っている施設で
ケアマネジャーをしている女性です。三十三歳で独身です
わ。おまけに別嬪さんです。

M きつと卒業された学部が違うのでしょうか。私は知らないで
すね。

T そうですかあ？ 今日、ここに来る言うたら、あの女性、
先生の名前を知ってましたけど。まだ、大学に勤めてるの
かって、言っていましたわ。

M 教授は話を戻そうとした。

M 別の方じゃないですかね。お母さん、お子さんは、今、公
務員になるための勉強を一生懸命してますから、このまま
頑張るよう伝えてください。これからが大切なので、気を
抜かないように、と伝えてください。私からもそうアドバ
イスしますが。今日は、この会に来ることをお子さんには
話されたのですか？

T 携帯にメールを送りましたが、返信は来ません。今日で良
かったです。私、ずっと手首が痛いさかい医者に通ってる

M んです。医者都合が悪くて、来週の今日に診てくれるこ
とになったんです。今日が来週やったら、今日は来れんか
ったです。今日はこの会が今日で良かったです。ほんまに。
そうですか。それは良かったですね。

T いいえ、良くもないんです。腱鞘炎が悪化したままやしね。
M ピリピリ痛いんですわ。これが。

M ……？ お母さん、成績や大学での生活はなにも問題ない
ので、このまま公務員試験の勉強を頑張るよう伝えてくだ
さいね。

— 少し慌てたようにM教授は話して、右手の腕時計をちらっと見た。
— 面談時間の二十分は過ぎようとしていた。面談室の入口から事務員
が「早く切り上げてください！」と視線をチラチラと投げてる。
次の面談者はしびれを切らしていることだろう。

T あの子とは最初、甲子園球場の近くのアパートに住んでま
したんや。でも、試合がある日は六甲おろしや応援が五月
蠅せむしうて五月蠅せむしうて、堪らんので、尼崎へ引越しました。と
ころが、あそこはガラが悪いんで、また東大阪へ引越した
んです。尼崎ってガラ悪いの知ってます、先生？

M ああ、聞いたことはあります。で、今日はどこから来られ
たのですか？

M 家から来ました。

T ……？ そっそうじゃなくて、住んでる場所ですよ(笑)。
M それやったら東区の〇〇公園の近くですんね。大きな公園
です。先生、知ってますか？

いえ、知らないです。

父親が亡くなって、小学二年のときに、父親の親を頼って今の所に来たんですわ。来た年は雪がぎょうさん降ってえ、大変でしたわ。ほんまに。寒いしねえ。

私も毎年、雪ハネをしますよ。

先生、四国の出身やから、ほとんど雪降らへんしねえ。私ら大阪へ帰るときは小樽から舞鶴までフェリーに乗るんです。先生も、四国へ帰りはるときは、フェリーですか？

いいえ、たいいてい飛行機を使います。神戸へ飛んで、そこから高速バスですわね。

飛行機は高価たかうつきませんか？ フェリーもええもんですよ。乗り慣れるとのんびりできて。

M教授はなんとか話を戻そうとした。

お子さんについては何も心配することはないですよ。このまま勉強を続けてもらえば大丈夫ですから。

先生のコネでどこかええ会社を紹介してもらえまへんやらか？

あいにく、コネは持ってないです。よく勉強のできるお子さんですから、どこかの公務員には受かると思いますよ。また、受かるよう指導しますからね。

近所で銀行に勤めていた人が辞めて、公務員になったって聞きましたけど、給料がえらい違う言うてますわ。……こんなこと先生に言っつてええんやらか？

何んですか？

T △△さんのお父さんは自衛隊で、あの子も一人っ子ですわね。

ん。うちの娘と仲がよくて。

M ああ、△△さんも一人っ子ですか。彼女もしっかりした子ですよ。私のゼミ生です。

T うちの娘は人が良すぎて困ります。

M どうかしましたか？

T 友達の××さんから○科目のレポートの書き方を教えてくれと頼まれて、ずい分と助けてあげたようすわ。お礼ももらわずに代書までしてあげて……。他人に頼まれると、断われん性分なんです、娘は。亡うなった父親そっくりですわ。困ったもんです。

— 面談室の入口に立つ事務員の視線が険しくなってきた。早く、切り上げてくださいという意思がヒシヒシと伝わってきた。後には三組の父母が控えていた。

M そうですか。ところでお母さん、今日は、何んで来はったんですか？

T はい、車でね、自家用車ですわ。タイヤの四つ付いてる。

M あれですわ。

T う〜ん？

M トヨタのカローラやけどね。何か？

M いえ、違います。〃何んで〃は理由ですよ。今日、ここに来られた理由です。何か、お子さんの大学生活のことで気になることがあるんじゃないですか。それを私に相談しようと思っつて……。

T

ああ、医者都合が変わってしもうて、来週になったもんでね。うまいこと今日、時間に余裕ができたっていうことです。で、この父母への懇談に來れたんです。ちよつと話を聞いてもらおう思うて。人間、口に出してしゃべると、すーつとすることもありますから。おまけに今日は美味しいお弁当も食べさせてもらうたし。男前の先生にも逢えて、運も回ってきたようすわ。大学もええ企画を考えてくれはりましたなあ。

M

おつ、お母さん。
♪丁度時間となりました〜、
ほな、サイナラー♪
の時刻となりましたわ!

4. これを読んで、感想をくれないか

潤三じゆんぞうはテーブルで雑誌を広げている女房へ少し強い口調で声をかけた。
「おい、時間があるなら、この原稿を読んで、どんなことでもいいから感想や修正点を指摘してくれないか? まだ、完成していなんだ」

手書き原稿を差し出した。

「素人の私にはできません」

女房はちらつと原稿をみたが、迷惑そうに断ってきた。

「いや、素人だからいいのさ。短い落とし噺だから、すぐに読めるし。

頼むよ」

「うーん。そうですかあ。じゃあ、読んでみましょうか」

めんどくさそうな答えが返ってきた。

女房は雑誌を閉じて、受け取った原稿に目を落とした。

☆

『濡れた回覧板』 吉田潤三

夕方、春樹はるきが玄関ドアを開けると、いつもはその音に気づいて出てくる女房が来ない。リビングへ入ると、女房は台所で夕食の準備をしていた。その横顔は不機嫌そうに見えた。

春樹はいつもより大きな声をかけた。

「ただいま! おい、どうしたんだ。鬼のような顔をして、何かあったのか?」

「ああ、お帰りなさい。ほんと腹が立っちゃってさあ」

女房は、野菜をきざむ包丁の手を止めて、溜息をつくように言った。

「どうしたんだ?」

「昨夜、小雨が降ったでしょ」

「ああ、明け方まで降ってたな」

「朝見ると、玄関フイドのポストに町内会の回覧板が半分だけ差し込まれていて、中身が濡れちゃってたのよ」

「回覧板なら、今朝、下駄箱の上に広げて置いてあったよな」

「そう。乾かそうと思つて、置いておいたの。連絡事項は緊急を要するものではなかったのよ、半日広げておけば乾くかなと思つて」

「うん。そうか。右隣の若夫婦が夜、雨の降る中を持って来て、投函せずに、差し込んだままにしたんだろ。濡れることに気づかなかつたのだろうよ。きつと」

「そうでしょうね。濡らしたのは右隣なのにね」

「それで怒つているの?」

「完全に乾くまで待つていると回すのが遅れるので、半乾きのまま、

お隣の××さん家へ持っていったの。いつもはそのままドアポストへ投函して帰ってくるんだけど、今日は濡れていることを教えようと思つて、インターホンを三回押しただけで、誰も出てこないのよ。なので、ポストに投函して帰ってきたの。すると玄関に入るなり、電話が鳴っていて、慌てて受話器を取ると、××さん家のお婆さんにいきなり、『あなた非常識でしょ!』『回覧板を濡らして回すなんて!』って怒鳴りつけられたの。いきなり怒鳴るんだよ」

「あのほとんど見かけない高齢のお婆さんにか?」

「そう。それで、濡れていることをお知らせしようと思つて、インターホンを三回押しただけで、お出にならなかつたので、お留守と思いつたに投函しました。お宅に居らしたのであれば、玄関へ出てきてくだされば、ご説明できましたけど。では失礼します!」って、私も腹が立ったから電話を切つてやつたわ。居るなら出てきなさいよね」

女房は、こんちきしょうと言いたげであつた。

「そうかあ。あのお婆さんも元氣なんだな。たまにしか顔を見ないけど」

「元氣! 元氣! すごい剣幕で『非常識でしょ!』って、言えるんだもの。家の中にいるのなら出てきて対応すればいいのにね。濡れている事情も聞かないで、いきなり『非常識!』はないでしょ」

「そうだよな。相手が年上であれ、俺だったら、もう少し口の利き方を気をつけろ!」って逆に怒鳴り返してやつたけど。あはつはつはつ」

春樹は女房をなだめるように言つた。

「ほんと、腹立つよ」

女房は語氣強く言つた。

「右隣の若夫婦にも雨で濡れるから必ずポストへ投函してくれつて言えよ、嫌われるよな。きつと。年寄りから説教をされたら受け取られかねないし」

「あんなに大きな声が出せるのだから、きつとピンピンしているでしょうよ。出てきて対応ぐらいすればいいでしょうに」

と女房はまだ怒りがおさまらず、春樹の話には耳も貸さず、同じ言葉を繰り返した。

それから、彼女は残りの野菜をきざみ終わると、流し台の前をはなれ、テーブルに夕食を並べた。その表情はしかめ面をしたままであつた。

春樹は女房とむかい合つて箸をとり、この空気を掃うよう「いただきます!」と弾んだ声を出してみたが、掃いきれそうもなかつたので、神妙にしゃべつた。

「お互い、年を取つてるんだから、隣近所とは仲良くやつていきたいよな。何かあると必ずお世話になるんだから。顔を見れば、挨拶ぐらひはしないと」

「私たち、ここに住んで二十年になるけど、私は隣のお婆さんをほとんど見たことないのよ。引越してきたとき、挨拶に行つて顔を見たきりだわ」

「そうかあ? だいぶ前だけど天気の良い日に、庭に出ているのを見たけどな。元氣そうだったぞ。ご主人も高齢で夫婦とも九十歳を越えてるのじゃないかなあ」

「最近、ご主人もほとんど見かけませんよ。お婆さん、あれだけ怒鳴れるのだから百歳まで生きるでしょうよ」

女房の腹立ちはまだおさまつていなかった。

春樹は改善策らしきものを提案してみた。

「郵便物はちゃんとポストに入れてくれるから問題ない。隣の若夫婦に直接、言つて嫌われるくらいなら、ポストの横に『回覧板は投函してください』ってメモ書きを貼っておくか。そうすれば、雨の日だつて回覧板は二度と濡れないだろ」

「でも、あの若夫婦もこちらが会釈をしても、返してくれませんかからね。注意書きを悪く受け取られかねませんよ。お付き合ひしやすいのは向かいのご夫婦だけね。こちらが挨拶すると、必ず返してくれますもの」

「ほんと、挨拶くらいし合わないで社会の秩序が乱れるよな。漢字で書くと」

と言って、春樹は箸をおき、左手の掌に右手の人差し指で壊乱かかんと書いてみせた。

☆☆

以上が原稿の内容であった。

ひととおり、目を通した女房は「は〜」とため息をついてから口を開いた。

「話そのものは実際にありそうなことよね。隣近所との付き合いも希薄になっていくことは実感できるし」

「閲覧板が濡れていたことは友人から聞いた話だ」

「じゃあ、これは実話なの？」

女房は春樹の顔を見て言った。

「いや、すべてが実話とはかぎらない。一般的な社会的風潮を書いただけだから」

すると、女房は原稿をペラペラと捲りながら続けた。

「感想しか言えないけど……、生真面目な奥さんの性格を表現するために、次のような文章を入れてみてはどうかかな。『このことがあつてから、雨の降る夜には、女房は布団に入る前に玄関フードのポストを確認するようになった』。どう？」

「う〜ん。いいかもな」

春樹はつれなく返した。

女房は原稿を数秒見つめてから、今度は、強い口調で話した。

「怒鳴ったお婆さんのことをもっとエゲツなく表現すべきよ」

「エゲツなく？」

潤三は不思議そうな顔をして聞き返した。

「だって、年上のくせに口の利き方も知らないようだし。だから、玄関先で対応しないそっちがもっと『非常識でしょ！』って言葉をあびせかけるのよ。普段、おとなしい人にこんな言葉を言わせるほど、お婆さんには常識がないってことが分かるし。日ごろの付き合いがないことからこんな言葉も飛び出す、と読者に想像させることもできるでしょ」

「じゃあ、何か、そういう言葉の裏返しとして、怒鳴られた女房がいかに善良な品格のある人物であるのかを読者に読み取らせようということだな」

「そうよ。絶対にこの奥さんは品格のある人物として描いて欲しいは」

「まるで、お前の願望のようだな。あはっはっはっはっ」

「いいじゃないですか。作家だって登場人物に自分の意見や感想をしゃべらせることがあるでしょ」

「あはっはっはっはっ。あるけどな。あはっはっはっはっ」

潤三の笑い声が止むと、女房は顎の下に右手の掌をやったまま深刻な口調になった。

「落とし嘶のようだけど、起承転結の転の部分が明確にあつてストンと落とせば、もっとよくなるように思えますけど……」

「そうか。ありがとう。でもな、落とし嘶だから一気に結びまでこないと感動しないだろ」

春樹は軽く反論してみた。

「でもね。書き言葉であれば、壊乱は難しくないけど、話し言葉だとこんな漢字のあることを知らない人たちもいるわ、きつと。なのでえ、こう書けばどうか。『回覧板だけに、こちらの胸の内を察するよう気を回してよ』っていう落ちもいいかもね」

女房は微かに微笑んだ。

「うん。そっかあ。参考にするよ」

潤三は困ったような表情をしたが、心の中では「うまい！」と叫んでいた。

「でも、一番直して欲しい点はそんなところじゃないの」

女房は自信あり気に強く言った。

「どこだよ。ぜひ、教えてくれよ」

潤三も強く聞き返した。

「それは私との共著にして欲しいってこと」

「なぜ？」

「だって、ヒントをあげたし、隣近所との秩序を保つには協調も大切でしょ。ふっふっふっ」

女房は会心のダジャレに笑みをこぼした。

5. 高価たかくつくから

「老眼かしら？ 新聞の文字が読みづらくなっちゃった」

「早目に、眼鏡を作れよ」

「うん、でもまだそんなに不便じゃないから。免許証の更新時にも考えようかな？」

「歳をとっても、近視は悪化するから、気づいたときに作るのがいいと思うぞ。早いに越したことはない。じゃないと、高価たかくつくぞ」

(一四)

還暦の近くなった私たち夫婦はこんな会話をする機会が増えた。

「眼鏡のせいで、とんでもない物を食べさせられたことがあるよ。腹を立てたわけじゃないけどな」

私は笑みを浮かべて言った。

「どうかしたの？」

「ああ、亡義母お婆あちむが元気だったころの話だけど、お前が札幌へ買物に出かけた土曜日、昼飯を用意してくれたことがあったんだ」

「へへ、そう」

「俺は、外で食べるつもりだったんだけど、お婆あちゃんが作るって言うてくれたものだから遠慮ぎみに、何かありあわせのものでいいですから。凝った物は作らなくてもいいですよ、と伝えたんだ」

「お金を使わなくて済んだじゃないの」

「そうだな。すると、お婆あちゃんは老眼鏡をどこかへ置き忘れたよ。うで、めがね、めがね。ってつぶやきながらキョロキョロと探したけど、見つけれなくて眼鏡をかけないまま、冷蔵庫を開けて、じゃあ、冷ご飯があるので、お茶漬けでいいかい？と訊いてくれたよ。老眼鏡がなくて煮炊きはしづらいと思っただろうね。はい、いいです。お願いします、とテーブルで待っていると、お盆に井を載せて、はい、どうぞ、と持って来てくれたまでは良かったが……」

私は言葉をきり、明らかに微笑んだ。

「お茶漬けなら簡単で良かったんじゃないの？」

「うん、そうだよな。超簡単だよな。俺はいただきますって二、三回口に掻き込んでから、違和感がしたんだ」

「梅干がついてなかったの？ 漬物？」

「いや、そうじゃない。味が違うんだ」

「ええ。お茶漬なんてどれもそう違わないわよ？」

「だろ。でも、どうも違うんだ」

「せっかく用意してくれたし、おばあちゃんも同じものを食べているので、不味いと言えなくて、半分以上食べてから、これ新製品ですかね？ いつも食べているのとは味がまるで違いますね、と尋ねると、
「あら、そうかい」とおばあちゃんは台所へ戻って、「これだけどねえ」とお茶漬の空袋を目元に寄せて、「のり玉って書いてある」と平然と読んだんだ。俺は思わず、「それふりかけですよ！」って語気を強めてしまったよ。ふりかけにお湯をかけて食べたんだ。あの日は。参った参ったあ」

私は口元を緩め、弾んだ声で言った。

「ふっふっふっ」

「笑うなって。俺が被害を受けたのだから」

「あなたも眼鏡をかけてるのだから、かけないときの不便さは判ってるんじゃないの」

「ああ、判るよ。でもな、ときどき眼鏡をケースにしまつて、裸眼で歩いてみることもあるんだ。もちろん信号機の三つの色は識別できるから、心配することはないけど。遠ーい遠ーい先にある電柱の先っぽを見つめながらテクテクと歩くんだった。しばらくすると目の中から汗がにじみ出てきて、よじんだ眼を洗浄してくれるような爽快感を覚えることもあるよ」

「目から汗？ ありえないよ」

「そう感じるんだ。疲れ眼が解消する感じかな。それに視力が弱いということは便利なこともあるんだぞ。裸眼で歩いていると、前方から嫌なヤツ、挨拶したくないヤツが来ても、その顔の表情を察知できないので安心できるんだ。嫌なヤツも俺が裸眼で歩いているので、きつ

と視られていないと思ひ込むようで、会釈さえしないヤツもいる。いやいや、こっちは十分に視えてますから……。視力が弱いと相手の本性を見抜けるという効用もあるんだな」

「そんなの相手に失礼じゃない？ 自分も会釈しないくせに」

「そうだな。でもそういう効用もある。しかし、いいことばかりでもない。気心の知れた友人に遭遇しても、こちらが表情一つ変えないで素通りするものだから、奇妙に思われるんだ。声を掛けられて判るときなど、すぐに眼鏡をかけて、「眼鏡をはずしていたので気づかなかったよ。ごめんね」と、謝ることもある」

「謝るくらいなら、眼鏡をかけて歩けばいいでしょ」

「まあ聞けつて。また、こんなこともあった。地下鉄の駅で遭ったので会釈をしたけど、気づいてもらえませんでしたね。何か悩み事でもあるんですか。真剣な顔つきでしたよ」と後日、問い詰められたこともあったよ。これにもただただ平謝りするしかないけど。「眼鏡をはずしていたものですから気づきませんでした。すみませんでしたね。今回は声をかけてください。無視しているわけではありませんので」。まあ、裸眼で歩くときは、たいていが嫌なヤツの顔を見たくないときだな。俺の場合は」

「好きなこと言ってるけど、かけずに歩いてたら、そのうち何かにぶつかると。いいことばかりじゃないのだから。怪我をしてからでは手遅れだから」

「だから、裸眼で歩くのはよく知った道でのことさ。たいていはかけてるから」

「気をつけてよね」

「ああ、判ってるってば。そう心配しなさんなって。眼鏡と言え、大感謝しなきゃあならないこともあったな。眼鏡のおかげで人生が開

けたというか」

「何よ、大げさね。それ、何よ。ねえ」

しきりに訊きたがる女房のリクエストに答えて、私は青春時代のひとコマを話した。

「俺が常に眼鏡をかけるようになったのは高校一年からだけど、それまでは我慢していたんだ。というのもそれほど裕福ではなかった親に買ってくれるよう催促できなかったから。あの頃は性格が優しくかったんだ、俺も。確かに、中学一年の梅雨時から、雨の降る日など、黒板の文字は見づらかったけどな。」

その中学の三年間は軟式野球部に所属してたけど、「めい」選手だったな。めいはめいでも迷う方の迷だ。二年の春に背番号9をもらい、ライトを守った。練習や試合では左や右と後方の飛球をよく捕りそこなったよ。チームメートからは、「お前は正面の打球しか捕れんのか？」ってよく言われたよ。試合ではタイムリーエラーをしたこともあって、気まずい空気をヒシヒシと感じたもんだ。今じゃあ、懐かしい青春の痛みだけだな。近視が進み、ボールと身体との距離感がつかめなままプレーしていたからな。どんなに下手でもそれは実感してたよ。その悪い影響はバッティングにも及んでしまった。そして、ついにレギュラーを後輩に取られてしまったんだ。あのときはなんとも情けなかったけど。後輩はなぜか眼鏡をかけていた。

それでも腐らず、練習は一生懸命した。俺の兄弟はみんなお袋のDNAを受け継いで、視力が弱く、二歳上の兄貴も高校で硬式野球をしてたけど、高校生になると、すぐに眼鏡からコンタクトレンズに替えたのよ。それで中学生最後の県大会が二カ月後に迫ったとき、俺は度数の合わないその眼鏡を兄貴からもらったんだ。それをかけると裸眼よりははるかによく見えた。県大会当日、監督は温情からだと思っけ

(一六)

ど、俺を先発メンバーとして使ってくれたんだ。ところが、その試合は最悪で、チームは五回コールド負けをした。が、その中で唯一、スコアブックにHを印したのは俺だけだった。すごいだろ。二巡目の打席でライト前にクリーンヒットを打ち、チームはノーヒットノーランを免れたんだ。あのヒットは生涯、俺の精神的な支えとなったな。学業成績が伸びないとき、仕事が困難を極めたときなど、あの打った感触やファーストベースへ駆け込む自分の姿を手元に引き寄せ、辛うじて心を立て直してくれる大きなヒットだったんだ。それは兄貴からもらった眼鏡のおかげでもあった、ということさ」

「ノーヒットノーランという汚名を返上するヒットだものね。そりゃあ、嬉しかったでしょうし、その後の自信にもなったでしょうね」

「うん、そういうことだな。自信はついたけど、高校、大学、就職後も視力だけは落ち続けた。高校生になって作ってもらった眼鏡は大学卒業までなんとか、使ったよ。さすがに度数も合わずフレームも古臭くなったんで、就職後の初月給で新調しようと、メガネ屋で検眼を受けたんだ。そのときの視力が裸眼で両目とも〇・〇五だったんだ。なんと〇・〇五だぞ。この数値を知らされたとき、そんな視力があるの？と我ながら不思議だったし、情けなかったよ。加齢とともに遠視が入ってくるので、近視の進行は止まるのかな？と思っていたけど、そんなことはないようで、まだまだ進んでいる。それに適切な度数のレンズを使っていなかったんで、すでに乱視が強くなってしまったんだ。眼鏡を外して目を眺めると、ボアツと三つくらいに見えるんだ。乱視というのは。だから、お前も早く、作れよ、悪くならないうちに。俺のこの眼鏡、レンズとフレームの合計でいくら払ったと思う」

「……？」

「一〇万だぞ。フレームが三万円で、レンズは近視と乱視の特殊加工

をするので約七万円したんだ。フレームが高すぎるよな」

「やっぱり免許の更新時に作るかな？」

女房はぼつりと言った。

「視力のいい他人がほんと羨ましいよ。ラーメンだつて、眼鏡をかけて食べると味が半減するんだ。お前なんか、まだかけてないから、こんな感覚、判んだろ。コンタクトにすると、ラーメンも美味く感じるって言う他人もいるくらいだから。冬場、戸外から暖かい部屋へ入ると、曇るしな。そんなときはほんと不便を感じるよ」

「そうね。部屋へ入るなり、眼鏡を外す他人を見かけるわね」

「だろう。さらに、俺なんかもっとみじめな思いをすることがあるんだ」

「眼鏡で？」

「うん、歳をとつても人間、自分がみじめに思える瞬間ときが幾つかあるだろ。俺の場合はメガネを作り替えるときなんだ。普段は特に不便もしていないけど……俺の眼は近視に乱視が同居しているのでそれに適したレンズが高価たかい買物となる。さっき言ったように一〇万だからな。これがまたみじめにさせるんだよな。余分な出費になるし。

そして視力が唯一絶対に問われるのは車の運転免許証を更新するときだけじゃないか。普段、視力が弱くても我慢できるし、誰からも文句は言われないよな。でも、更新手続きの一つに視力検査があつて多少、視力は弱くても交通標識や赤青黄色の信号も見えるから心配しなくてもいいんだけど。でも、これをかろうじて通過するために更新ごとにメガネを新調してきたからなあ。

前回の更新時はちよつとヤバかつたんだ。大小の「C」の穴の空いている方向を答える視力検査があるだろ。あれはフランスの眼科医に因んでランドルト環かんと言うんだ。知らなかつただろ。広辞苑にも載っているけどな。あれを「右」、「下」、「左」、「上」って順に山勘で答えて

たら、検査員がときどき「えっ」ってもらす声が聞こえてくるんだ。

きつと最低基準の〇・七もなかつたんじゃないかな。事務的に処理してくれたんだろうな。あの検査でひっかつたら、再度、更新講習に行かなきゃならないからな。面倒だよな。そうならないようにお前も作ればいいと思うよ。まだ、車の運転はするんだろ？」

「うん、するよ。買物を背負って帰るのが大変だもの。眼鏡を作るときつて眼科で視力を測ってもらつてから、カルテをメガネ屋さんへもつていくの？」

「いや、さっきも言ったようにメガネ屋に検眼する資格を持った店員がいて、その人が測ってくれるよ。眼科と同じくらいの正確さだから、大丈夫だ」

「お父さんはいつもどこで作っているの？」

「俺は若いときから同じ店で作ってきた。前回までのカルテが残っているので悪化の進行ぐあいも判るから。それ、文京町の白樺通りに新しく支店ができたメガネ屋があるだろ、あそこで十分だ。十二号線沿いの若葉町にある店は駄目だぞ、高価たかいばかりで焦点距離の合わないものを買わされるから。俺もずっと前に一度、あそこで失敗したから、あそこは駄目だ」

「保険証とかも要るのかな？」

「いらないうつて！ 眼科じゃあないから。必ず視力検査をするから、心配するな。双眼鏡のような検眼器を覗き込んで、指定される記号や文字を答えるんだ。それで同時に焦点距離も測れるみたいだ。

例えば、文字であれば、「では、はじめますね。最初に、これを読んでください」と訊いてくるから。

「はい。[C]です」と答えると、

「次、いきますね。これどうでしょう？」

「ちょっと小さいですね。でも□と◇、です?と答える」

「そうです。読みづらかったです?」

「はい」

「『じゃあ、少し大き目のこれはどうです?』と、さらに試してくる。

『せ、です』

「はい。そうです。読めますね。じゃあ、連続で、次はどうでしょうかね?」

「えーとですねえ。△です、きつと。□かな? 次が◇と◇かな?」

「はい。大丈夫です。読めますね」

と順調に正解しているのだが、

「これはどうですかねえ。読めます? 見えます?」と、先ほどよりも小さな文字を指定してくるな。「見えます」と答えると畳み掛けのように、いやゝ勝ち誇ったように訊いてくるぞ。

「では、これは読めますよね?」

「△、です」

「ではでは、次のこれはどうでしょう?」

「これは無理ですね。完璧に見えないです」

「判りました。じゃあ、最後に、これはどうですかね? 読めます?」

「△、△、です」

「はい終了です。お疲れ様でした」と、ものの五分くらいで検眼は終るんだ。もちろん視力を測っているのだけれども、同時に学力も試されているように感じてしまうんだな、これが。読めますか、見えませんでしたか、読めません、見えません、つて答える自分が情けなくて、みじめに思えるんだよ。そんなとき、壁にかかった検眼師の資格証を見ると、なぜか店員が立派な人物にみえて反抗したくなるね。見えない文字が指定されるとちやかして「読めません!」と答えてみ

たくなるときもある。だって、読んでみろつて指示するんだから。「読めません!」つて答えれば、コントだな。あはっはっはっ。でも、一度やってみたいな。

検眼後、店員は、痛いところを突いてくるぞ。

「前回よりも近視の度が進んでいますね。この分では車の免許証の更新時にひっかかりますよ」

商売が上手い! この瞬間も、俺はみじめで屈辱を感じるんだよ。

それを自覚しているから新調しに来たんだ! 免許のためだ! つて叫びたくなる。歳を重ねても近視は進行するようで、我ながらまったく情けない。もうゝ。

前回なんか、『仕事でPCを使います?』つて訊いてくるから『はい』つて答えると、それでは中近両用といってワープロを打つ焦点距離にしてくれたんだ。いい時代だな。顧客志向つてやつだ。狭い店内を忙しく、動いている店員を見ていると、店員たちが全員メガネをかけていることに気づいたよ。似合っている方もいれば、そうでもない方もいた。

思わず、こういう仕事に就くには眼鏡をかけている人が優先されるのです?と尋ねてしまった。

すると、レンズの加工具合をメモしている店員は、顔も上げず無造作に答えてくれた。

『そんなことはないですよ。たまたま当店のスタッフが眼鏡をかけているだけで、採用条件にはなっていないですよ』

でも、そっかあ? 怪しいよな? だって、どのスタッフも違った色や形のフレームをかけてるんだぞ。マネキン人形のように。これつて疑って当然、だろ?

おろかにも俺は商売柄、彼／彼女らは「伊達眼鏡」をかけているの

かなと思っただ。いわゆる「さくら」というやつだ。さくらに検眼されて高額紙幣を支払っているとしたら、もっとみじめで情けない思いをしたことだろうな」

こんな体験談をひとしきりしゃべった私は眼鏡を外し、レンズに「ふうふう」と息を吹きかけ、その曇りが消えてしまわないうちにティッシュで拭き取りながら、女房にアドバイスをした。

「だからな、お前も遠視用を早目に作ったほうがいいぞ。乱視が入ると高価くつくから」

ぼやけて見える女房のその大きな両眼玉が何を語っているのか、私には読み取れなかったが。

6. 斯業経験

高齢のお金持ちを狙った特殊詐欺が後を絶たない。二〇一四年の一年間における被害総額は約五九五億四〇〇〇万円で過去最高となった。警察は過去最多の一万七三一件、計二九六億五〇〇〇万円の被害を事前に防いだが、推移をみると被害金額も件数も増加しつつある。

被害額の約七割は親族になります「オレオレ詐欺」、医療費や税金の還付を装う「還付金詐欺」、未公開株や社債の購入を勧める「金融商品詐欺」が占めていた。

テレビや新聞による注意喚起ではほとんど抑止効果もない。詐欺組織はピラミッド型になっており、役割分担も、騙しの電話をかける「かけ子」、現金を受け取ったり引き出したりする「受け子」「出し子」など細分化している。詐欺師たちに「割に合わない犯罪」と認識させるには、組織幹部の逮捕が欠かせない。しかし昨年、警察が逮捕・書類

送検したのは過去最多の一九九〇人であるが、そのうち主犯は七四人(三・七%)にしかすぎない。

詐欺師たちは判断能力の低下している老人をターゲットにする場合が多く、この詐欺の被害者は四人に三人が六五歳以上の高齢者たちである。地縁、血縁、社縁の無くなった独居老人も多い。そのため詐欺に気づいても、再び別の詐欺で騙されることもある。

「ピンポン、ピンポン。いつもお世話になってます、△△信用金庫の田代ですが。お変わりないですか。今日は定期預金の件で、お伺いしました」

「はい、はい。田代さんね」

老婦人は、ゴミ袋を手にしたままドアを開ける。

「さあ、どうぞ」

「おじゃまします。ああ、ゴミ出しですか。まだ収集車は来てないですよ。私がゴミステーションへ持って行ってあげましょう」

「あら、すみませんね。銀行の方にこんなことをしてもらって」

「いいんですよ。これくらい」と言って、田代はゴミ袋を受け取り、ステーションへ置いて、戻ってきた。

そして、老婦人宅の玄関に入り、いつものように上がり口に腰を降ろした。

「三年前にお預かりした五〇〇万円の定期預金が明日で満期になります。もし、すぐにご入用でなければご継続にいたしますが。どうされますか?」

「定期ねえ。五〇〇万。そうねえ。どこにも使うあてのないお金だから定期の継続にしておうかしら」

「そうですね。ありがとうございました」

田代は深々と頭を下げた。

「あら、嫌だわ、お茶をさし上げなくちゃ」

老婦人は慌てて立ち上がった。

「いいえ、かまわないでください。仕事の途中ですから」

「いいじゃないですか。毎月のように訪ねてくれるのですから、ご親切には感謝しておりますのよ。それに私はいつも一人ぼっちで話す相手もいませんし。ほっほっほっ。さあ、どうぞ」

老婦人は台所からお茶を持ってきた。

「すみませんねえ、いつも。じゃ、いただきます。ああ、このお茶、いついただいても美味しいですね。(もう一口飲んで) ああ、落ち着きますよ。高級な茶葉なんでしょうね」

「そうでもないですよ。茶農園から直接、取寄せているだけです。ごく普通のお茶です」

「そうですか。私にはとっても美味しいですけど。ところで、こんなことをお聞きすると失礼かもしれませんが、〇〇様は、お若い頃、どんなお仕事をなさっていたのですか」

「あら、お話ししなかつたですかね。私も夫婦には子供が授からなかつたものですからね、家電メーカーに勤務しキャリアウーマンで通しましたのよ。主人も同じ職場にいましたが、定年後すぐに他界してしまいましたの。あつけなくね」

「ご夫婦で働いてらしゃつたのであれば、貯金も十分過ぎるほどできたでしょうね。ましてや家電メーカーともなれば、退職金だつてたくさんもらつたのでしょ」

「お金があつても、これといった道楽もしませんし、引き継ぐ者もいませんから、宝の持ち腐れですよ。たまたま本を買うくらいですかね。子供がいて孫でもいれば、もっとお金の使い方もあるでしょうけど。」

ほっほっほっ」

「でも、ご兄弟や親戚の方もいらつしやるでしょ」

「いいえ、私たち夫婦は一人っ子で兄弟もいませんし、親戚もみんな他界してしまひ今、私は文字通り独居老人ですよ。独居。ほっほっほっ」

「でも、この町内は高齢者が多いということで、近所付き合いも盛んなんですよ。町内会の老人会とか老人クラブには入つてらつしやのでしょ」

「いいえ。年寄りが多くても近所付き合いはほとんどないですし、周りは世代交代して若い人たちが増えてますしね。道で会釈をしてご挨拶する程度でしてね。でも、苗字も知りませんのよ。お隣のお若いご夫婦だつて、どんな方なのか知りませんわ。覚えるよりも、忘れることの方が多くてね。ほっほっほっ。これじゃ、いけませんね。お若いといえば、田代さんは入行されてなん年目でしたかね」

「ああ、はい。以前にもなん度かお話ししたように、五年目です。相変わらず営業の毎日です。内勤に憧れますね。まだ結婚もしていませんし」

「雨の日も、風の日も、雪の日も、暑い日も、大変ですわね」

「しよがないですね。偏差値の低い大卒ですし、預金の獲得金額がもっと増えて実績が認められないと、金融機関は……。できれば転職したいのですがね。ところで、こんなことをお訊きするものなんのですか」

「あら、何かしら？ 転職のお世話かしら。お嫁さんかしら。ほっほっほっ」

「いいえ、そんなことありません。定期預金の他に筆筒預金なんかお持ちですか。ご高齢の方はよく筆筒に現金を仕舞つてお聞きしますわ」

「そうですねえ。私の歳であれば、もちろん筆筒とはいわないまでも

家のどこかに現金を置いていますよ。お金がないとなにも始まりませんから。急に、銀行へ行くこともできませんしね。歳寄りは。ほっほっほっ

「そうですか。きっと、たくさんお持ちなんでしょうね。他の金融機関にも預金があるでしょうし」

「歳を取るとね、欲しい物もなくて、お金を使う機会がないの。おまけに身体だけは丈夫で病院へも通ってませんしね。たくさん持っていたも、持ったまま死ねないのにねえ。早いとこ、どこかへ寄付でもしようかしらねえ。でもね、どこの銀行に幾ら預けているのかさえ、忘れてますし、預金通帳だって、どこへ仕舞い込んでいるのかさえ、忘れてしまっているのよ。銀行の方に教えてもらわないと、金額だって分かりませんし。ほっほっほっ。田代さんも知恵を絞って一生懸命働けば、お金持ちになれますよ。まだまだお若いから。知恵をね、しっかりと絞ってお使いなさい。きっと好いことがありますよ。焦らずにね」

「そうですか。知恵ですか、一生懸命ですか……でも、お金持ちが羨ましいです。本当に。働けど働けど……私のような安月給の者には」

数日後の夕方、この独居老婦人宅の固定電話がけたたましく鳴った。

「もしもし、はじめまして、〇〇証券会社の営業課顧客担当の近藤という者ですが、奥様宛で××会社のパンフレットが送付されていますか。よろしければ、その会社の株を買う権利を私どもに譲ってほしいのですが。名義を貸していただけませんか」

「はい。先日、そのパンフレットなら届きました。私は、株の購入には興味がありませんので、パンフレットは捨てました」

「そうですか。今、買っておくとも必ず高配当を得ることができそうですけど」

「分かりました。それでは、奥様の名義を貸していただいて、こちらで株を買わせていただきます。購入する権利を譲っていただきます。よろしいですか」

「はあ？株には興味ありません。あなたにお譲りします」

三日後の夕方、××会社の土方と名の男から電話がきた。

「近藤は証券会社の社員なので、株を購入すると違法なインサイダー取引になり罰せられます。名義を貸したあなたも共犯です。必ず裁判を受けることになりますよ」

「裁判は困ります」と老婦人がうろたえて答えると、土方は「それでは株を買って一時的に株主になれば、法的問題は無くなります。その後で証券会社へ売ればいいのですよ。まずは早く購入すべきだと思いますが。裁判になれば、結審するまでに四、五年はかかります。その間、多額の裁判費用も出費しなければなりませんし、確実に有罪になりますよ。刑務所に服役するかもしれませんよ」

「刑務所という言葉に老婦人は怖じけて訊いてしまった。

「はあ。では、いくらで購入すればいいのです？」

「はい、五〇〇万円です」

さらに訊いてしまった。

「銀行振り込みでしょうか」

「いいえ、会社の者が直接、お宅に受け取りに伺います。名義貸しですから、急がなければなりません。振り込みではとても間に合いません。急いでください。明日の昼前に伺いますので、必ず現金を用意しておいてください。よろしいですね」

裁判、有罪、刑務所という言葉が耳にこびり付き、老婦人は睡眠不

足のまま夜が明けた。そして早速、地元の△△信用金庫で定期預金五〇〇万円を解約し、自宅へ戻った。解約手続きは、毎月のように自宅へ顔を出してくれる営業係りの田代を指名したが、あいにく営業に出た後であった。窓口の女性からは大金を持ち歩くのは危険だとか、何に使うのか、と尋ねられたが、老婦人は「資産運用で株を買いますのよ」と答えた。窓口の女性は営業係の田代の顧客ということから安心してしまった。

自宅に戻り、一時間ほどすると、××会社の志村しむらと名のる若い男が現金を受け取りにきた。スーツを着た男は礼儀正しく、口調も丁寧だった。老婦人は疑うこともなく、信用金庫の封筒に入った現金を手渡した。そしてようやく、ほっとする時間がもてるようになった。

二日後の夜、再び老婦人宅の電話が鳴った。

「もし、もし、先日、株を購入してもらった、××会社の高木たかぎですが、株を△△証券会社へ売却する手続きに三〇〇万円必要です。株の価格は上下しますので、明日のうちに手続きをしないと、費用が大幅に増えてしまいます。名義貸しの株は売買費用も高くなりますので。明日の昼前にご自宅に現金を用意しておいてください。社の者が受け取りにまいりますから」

名義貸しという言葉聞いて、老婦人は裁判、有罪、刑務所という言葉思い出した。慌てて、老婦人は筆筒の中に隠しておいた現金三〇〇万円の入った茶封筒をテーブルの上に置き、丁寧に数えた。

翌日、前回とは違った若い男がやってきた。手渡す際に、オドオドしながら老婦人は尋ねた。

「これですべて解決するのですね。裁判にはならないですよね」

男は、「会社の担当から、また連絡があると思います」とだけ答えて足早に消えた。

玄関先で見かけない若い男に老人がソワソワと対応していることを訝しく思った近所の住民が事情を聞き、すぐに駐在所へ連絡をした。やってきたのは若い伊東巡査いとうであった。伊東巡査に色々事情を訊かれ、ようやく老婦人は自分が詐欺に引っかけたことを理解した。

この事件は白昼、詐欺師が被害者宅の玄関先で大金を騙し取ったということ、いつも以上にニュースや新聞で大きく報じられた。

この種の事件は不思議なもので、犯人は一度、騙した相手を再び騙すし、騙された方もまた騙されるということが頻繁に発生している。そこで伊東巡査は、この被害者を徹底的に警護することにした。勤務日には、朝昼夕と直接、自宅へ出向き声をかけた。詐欺被害を知らせるチラシも電話機の横の目の高さの位置に貼った。チラシには「お金を要求されれば、それは詐欺です。まず、警察へ通報しましょう」と書かれていた。

伊東巡査は所轄管内での詐欺事件の撲滅に火がついたという熱心さで知恵を絞り取り組んだ。

しばらくすると、情報セキュリティ会社の土井どいと名のる男から老婦人へ電話があり、

「あなたが詐欺の被害者であることは詐欺被害者名簿に記載されています。名簿に記載された名前や住所、電話番号などを消去しないとまた詐欺にひっかかりますよ。わが社はこうした個人情報消去するサービスを提供しております。明日の昼前に二〇〇万円をお支払いしていただければ、すぐに消去できます。料金はこちらから受け取りに参ります。この電話の後に、担当の弁護士べんごしの先生からもご連絡がいくと思えますのでよく説明をお聞きください」

と、現金を要求してきた。

受話器を下ろして、二分と過ぎないうちに弁護士を名乗る男からも電話があり、早く料金を払って詐欺被害者名簿から名前を消去してもらうよう勧められた。

老婦人は、電話機の横のチラシに目をやり、よくは判らないが、金を要求されたので、「分かりました。お金は、明日の昼前には用意しておきます」と言って、電話を切った。そしてすぐに駐在所を訪ねた。

老婦人は伊東巡査の教えに従って、「騙されたふり」作戦に協力した。翌日、現金を受け取りにきた二十代の男は玄関先で詐欺未遂の容疑で現行犯逮捕された。逮捕したのはもちろん伊東巡査であった。

それにしてもなぜ、詐欺師たちはお金持ちの高齢者を特定化できるのであるのか。非番の日、伊東巡査は次のような仮説を立てて、推論してみた。

単なる高齢者では詐欺師も騙す価値がない。詐欺師はお金を貯め込んでいる高齢者名簿のようなものを持っているはず。事実、逮捕後、調べてみると、そうした名簿が証拠物件として出てくる。では詐欺師たちはその名簿をどうやって、どこから入手するのか。ここが肝心である。伊東巡査は自分が詐欺師になったつもりで推論した。

単純預金でないかぎり、どんな人も金融機関へ預金をする。たとえ、金利がゼロに近い数値であっても預金をする。これは日本人の美德とも言われてきた。ましてや年金頼みの高齢者であれば、きっと金融機関へ預けるであろう。スズメの涙にもならない金利を稼ぐために。そう、誰がどれだけ預金を持っているのか、を知り得るのは税務署か金融機関のいずれかである。

こうした詐欺の標的になりうるということから日本では長者番付さ

え公表しなくなった。であれば、税務署ではなく……伊東巡査の脳にはすぐに金融機関が浮かんだ。詐欺師たちは地元密着型の金融機関の預金者名簿を持っているのかもしれない。その名簿には預金額のみならず、もちろん年齢、住所、電話番号等の基本情報も記載されている。銀行員、特に外回りの営業係りであれば、必ず、この名簿を見て営業活動をしているはずである。金を持たない庶民に営業をしても無駄骨を折るだけである。

営業係りの仕事はもっぱら預金の獲得であるから彼／彼女らは預金額を増やしたり、預金の付け替えをしてもらうためには必然的に高齢者へは親切的な対応をする。とりわけ三無縁の（血縁、社縁、地縁の無い）独居老人であれば、営業係りの銀行員は世の中で唯一の話し相手にもなり、親密感や偽りの信頼感も高まるであろう。

それを通じて、預金者の性格、家族構成、独居か否か、近所付き合いなどの情報を容易に入手できる。これも事実、逮捕後、調べてみると、詐欺師たちが持つ名簿にはこうした項目が明記されている。詐欺師はこうした銀行員を抱き込みさえすれば、容易に獲物を特定化できるかもしれない。

こうした推論が成り立つたとしても、金融機関の協力がなければ、また個人情報保護に関わることも多いので、検証するところまでは進めない、と伊東巡査は結論を出した。

この詐欺事件の「受け子」を逮捕後、伊東巡査は自分の推論を検証するべく、本庁の担当刑事に進言し、△△信用金庫を入念に調べた。特に、顧客への聞き込みと営業係りへのヒヤリングを重視した。その結果、高齢者名簿を詐欺師に流していたのは老婦人に親切であった営業係りの田代であることが判明した。それは田代が老婦人と一番接触が多い人物だったことから割り出された。犯行の動機は入行後、営業

係りが五年にも及び、毎月ノルマの預金額を確保できないことからくる不満からだったそうだ。詐欺師からは銀行の給与よりも高い報酬を得ていたようである。ただし今回、逮捕した者は「受け子」「出し子」と呼ばれる下っ端である。主犯を逮捕しないかぎり、この種の詐欺事件は撲滅できない。

では、伊東巡査はなぜ、こうした手柄を上げることができたのであろうか。それは前職での勤務経験の賜物であった。伊東巡査は大学を卒業後、六年間大手の銀行に勤務し、営業係りのまま過ぎた。入行前は融資に関わる仕事を熱望していた。入社試験の面接でもそれを強くアピールした。内定通知を手にしたときは飛び上がって喜んだ。

さすがに大手の銀行である、同期の入社仲間たちは自分よりも偏差値の高い一流大学を卒業した者たちが多かった。そのため入社時に配属された営業係りという仕事に、俺なんか、こんなものかとあきらめ、雨の日、風の日、雪の日、暑い日も、自転車でお得意様回りと新規顧客の開拓に汗を流した。穿き潰した革靴のなんと多いことか。憧れの内勤は夢のまた夢であった。こうして伊東巡査は銀行での業務情報の入手の難易や営業係りの大変さを身にしみて知っていた。

しかし、いつしか営業係りという外勤は、給与と比べれば報われる仕事とは思えなくなつた。また日々の業務をこなす自分が機械の歯車のようなものに思えてきた。その後、人助けのできる仕事に興味を湧き、伊東巡査は受験資格上限年齢まであと二年という二十七歳で、転職を思い立った。そして猛勉強の末、警察官の採用試験に合格した人物であった。キャリアはまだ二年でしかなかった。

付記。この創作文はフィクションである。特殊詐欺師がどうやって高齢の金持ちを見つけるのか、を想像して描いた。実際に、こんなことがあってはいけない。『朝日新聞』二〇一五年一月三十日、朝刊を参照した。

7. とんな話

一

「コンコン！」

「はい！ どうぞ！ 入ってください」

「先生、こんにちは、増田です。今、お時間、いただいてもよろしいでしょうか」

「ああ、久しぶりだね。増田くん。いいよ。どうぞ、座っていきなさい」

「はい。先生。子供が生まれましたので、ご報告に来ました」

「そう、それは良かったね。おめでとう！」

「はい。ありがとうございます。二日前に男の子が生まれました。まだ、病院にいますが、家内とも元気です」

「初めてのお子さんだから、可愛いし、男の子だと楽しみだね」

「はい。家内は年齢が高かったので、少し心配しましたが、無事に予定通り生まれてくれました」

「じゃあ、何かお祝いを差し上げないといけないな。今日、帰ったら、女房に伝えておくれから」

「いえ、お祝いなんて……。勉強でお世話になりっぱなしで、仲人までしていただいて……。長男が生まれたということをお伝えできれば十分です」

「そんな訳にはいかないよ。君は私の弟子だし、これまで他の弟子たちには皆お祝いをしてあげてるから」

「すみません」

「奥さんはなん歳だったけ」

「はい、三十一歳です。一年とちょっと前に結婚しましたから」

「ああ、そうだったね。グランドホテルだったよ。ご家族だけだったけど、とても人情味のある暖かい式だったよ。奥さんも美人だし」
「いえ、そんなことないですよ。ゴミ溜めから拾ってきたようなものですよ」

「松本くんや加藤くんが羨ましがってたよ。増田くんは綺麗な別嬪さんを見つけたってね。確か、奥さんは三人姉妹だったよ」

「はい。そうです。僕と同じ末っ子です」

「上のお姉さんたちは早くに結婚されたって、義母おかあさんが式の時おっしゃってたね。私も三人の娘がいるけど、まだ一人もかたづいていないんだよ。式の時、女房は義母さんにどうやって三人の娘さんを嫁がせたんですかって教えてもらってたけど。長女も三十路になろうとする歳になってきて女房もプレッシャーを感じているみたいなんだ。下の二人の娘はお姉ちゃんが結婚してから自分たちは考えるなんて言ってるね。歳ばかり重ねて、困ったもんだよ。私も孫の一人や二人いてもいい年齢になったからね」

「ああ、お嬢さんたちはまだ結婚されてなかったですか。もうお孫さんがいるものと思ってました」

「それがまだなんだよ。長女は国家公務員をして、紹介してくれる他人もいて、なん度も見合いをしているんだけど、どうも決まらなくてね。急がないと売れ残っちゃうよ。君の職場に年頃のいい男性はいいかな？」

「そつ、そうですね。僕よりも若い先生がいるので、あたってみましょうか」

こんな相談を受けたのは初めてで、私はそう答えながら、ある独身の若い教員の顔を頭に浮かべていた。

「誰かいたら、頼むよ」

「あつ、はっはい」

二

私は別の大学に勤務する先輩の研究室を訪ねた。

「コンコン。先輩！ 増田です！」

「ああ、増田くん、どうぞ、開いてるよ。入ってください」

「お久しぶりです」

「元氣そうだね。今日はどうしたの？ 図書館に資料を探しに来たのかい？」

「はい。でもあるんですけど、別件でお願いがありました」

「何かな？」

「先日、宮下先生にお逢いして話していたら、お嬢さんの結婚相手がいたら紹介して欲しいと頼まれたものですから。三人ともまだ結婚してないそうです。特に、長女の方は年齢も高くなってきたので、先生も奥様も心配されているみたいです。この大学に誰か若い教員はいませんか」

私は期待をして用件を告げた。

「ああ、その話ね。ここにもまだ結婚していない教員はいるけど、お嬢さんとは歳が離れすぎてるよ。だいぶ前に紹介しようと思って声をかけたら、お嬢さんよりも父親、先生が立派すぎて自分は嫌だと断られたことがあったし。結婚してから父親と比べられるのが嫌だったさ」

「親と娘は関係ないと思うけどなあ」

「しょうがないよ。本人がそう言うのだから。それに一番上のお嬢さんはずい分、見合いをされているよ。それでも決まらないから奥様は先生よりも気にしているのさ。先生に用事で電話をすると、奥様に愚

痴られるし、誰か紹介してくれて必ず、頼まれるもの」

「見合いをしてるんなら、誰かいい男性に出会いそうですけどねぇ」

「そうそう、別の大学の先生とは結納を交わす直前までいったようだけど、潰れてしまったみたいだよ。奥様が電話で悔しそうに、そう話していたから」

「どうして、潰れたのですか？」

「なぜ、結婚するのか解からない、ってお嬢さんの方から言い出したみたいだよ」

「結納の段階でそんなことを言ってるようじゃあ、まとまらないですよ。ルンルンしている状態ですよ、その頃は。結婚なんて熱くなくって、うちに勢いでしちゃうものですよ」

「そうだよ。ふっふっふっ。増田くんなんか、紹介されて即決だったそうじゃあないか。聞いたところによると、美人の奥さんらしいね。」

宮下先生が言うのだから、嘘じゃなくて、きっと美人なんだろうなあ」

「そんな美人じゃないですよ。僕も歳をくってましたから。それに性格が自分に合う方だったので、迷わず翌年の三月に式を挙げましたよ。そのため、家内にはお父さん焦っていたみたいなんて冷やかされたこともありましたけど。ああ、いけない。僕のことじゃなくて、お嬢さんの相手を探さなくっちゃ」

「自分もあたってみるけど、増田くんも君の大学で探してみてよ」

「そうですね。やってみますけど」

三

職場の小会議室にて。

「第三問目の計算問題は難しくないかな」

「これは数学というよりも国語の問題ですから。だって価格の上昇率

五十%に対する消費の減少率四十%を計算しなさいですよ。に対する」という意味させ解わか解わかければ、〇・八つてすぐに出るじゃないですか。単純な割り算ですよ」

「でも、今の受験生たちはこんな意味も理解してないし、計算もできないから」

「増田先生！ 計算問題はこの一問だけで、他はすべて語句選別の穴埋め問題ですから、この計算が解けないとしても、他で十分に点数は取れますって」

「そうか。じゃあ、判ったよ。このままでもいい」

「後で、事務局へ提出しておきますね」

「頼んだよ」

このやり取りをもって、私は同僚の三木先生と入学試験の『政治・経済』の問題を推敲し終わった。

「ところで三木先生、別件でお願いというか、確認したいことがあるのですが、時間はいいかな？」

私は書類を片付けながら声をかけた。

「はい、いいですよ。今日の業務はこれだけなので、事務局へ手渡して、それから帰宅するだけです。何でしょうか？」

「実はさあ……、三木先生は独身だよ。大学院を修了後、赴任されて四年目だから三十二歳かな？」

「いえ、修了後は助手を二年してから、こちらに雇われたので三十四歳です」

「そう、誰かつき合っている女性はいるのかい？」

「私は一気に用件を口にした。」

「いません！ 僕は永遠の童貞で独身を貫くつもりですから。子孫を残そうとも思っていないせし」

まるで答えを用意していたような返事だった。

「おい！ 冗談はよしなさい」私は思わず、語気を強め、「結婚しないでどうするんですか？ まだ若いのに」と続けた。

この声に三木先生は表情を変えることなく無言をとおした。私は心が動くことを願い提案した。

「それじゃあ、紹介したい女性がいるんだけど。先生よりも六歳くらい若い方なんだよね」

「宮下先生のお嬢さんでしょ？」

三木先生は私を睨むような目で言った。

「ええっ！ 何んで、知ってるの？」

私は口をあんどりと開けたまま応えた。

「お嬢さんであれば、五カ前にお見合いをしました。指導教官にぜひ会ってみろって言われて、一緒に食事をしました。私にはもったいないくらい知的でエレガントな女性です。自分には分不相応だと思っていたら、丁寧に向こうからお断りされましたよ」

三木先生はなんのわだかまりもないというふうと言った。

「そっそうだったの！ ごめんね。そんな経緯いきさつは知らなかったものだから、宮下先生からもいい男性がいれば、紹介してくれと頼まれていたし。先輩にもこの大学で探すよう忠告されたので……。とっさに頭に浮かんだのが三木先生だったもんでね。宮下先生や先輩には三木先生のこととはしゃべってないから。ほんと、ごめんね、何も知らなかったから、本当に申し訳ない」

私は自ずと深々と頭を下げていた。

「止めてくださいいよ、増田先生。頭を下げることじゃないですよ。いいんですよ。僕のことを心配して声をかけてくれたことぐらいは理解してますから。僕の方こそ、気を使っていたいで、申し訳ないです」

今度は三木先生が深々と頭を下げた。

「そっかあ、まあしょうがない。こればかりは、ねえ。ほんと、ごめんね。でも三木先生、なぜ結婚しないのですか？ ああ、こんなこと訊いちやあいけないんだ。ごめんごめん」

研究室へ戻った私は変に淋さびしい気分になっていた。人を喜ばすことは悪いことではない。自分はうまくいけば当然、ある喜びを感じていわけであった。ところが、どうだろう。この変な淋しい嫌な気分はこの感情はどこからくるのだろうか。これは人知れず悪いことをした後の気分にも似ていた。もしかしたら、自分がしたことが善事だという変な自意識があつて、それを当然のごとく裏切られたことが、こうした淋しい気分になせるのであろうか。してしまったことをもう少し小さく、気楽にとらえるべきなのだろうか。自分はこだわりすぎているのだ、恥ずべきことをしたわけではない、不快に思うこともない、と考えようと決めてから研究室を出た。

四

帰宅後の自宅にて。

「あああ。ただいま！ あああ」

私は帰って来た宣言をしてからベビーベッドで眠る長男のほっぺをツンツンと軽く突いた。

「お帰りなさい！ どうしたの？ お父さん。帰ってくるなり大きな溜息ついて」

家内は夕食の準備をする手を止めて、訊いてきた。

「ああ、今日さあ、同僚の若い先生に宮下先生のお嬢さんを紹介しようと思って声をかけたのさ。そうしたら、五カ月前に見合いをした

そうで、破談になりましたって、当人から教えられたのさ。知らなかつたとはいえ、十分に謝ったけど、何か自分が意地悪をしたようで、自己嫌悪というか情けなくなつてさあ。うまくいかんなあ。その後、変に淋しい気分になつちやんだ」

「なぜでしょうね。そんな淋しい気分になるなんて。不思議ですね」と、家内は心配そうに眉をひそめた。それから、ちよつと考えるふうな顔つきをして、不意に言った。

「そんな気分になることもあるわよ。何でだったか、私もそんな思いをしたことがあつたから」

「そうか」

「本当にそういうことであるわよ」

家内は私を励ますよう力を込めて言った。

「よう解からんな。自分の感情だのに」

「宮下先生のお嬢さんなら三人いらつしやつたんじゃない？ 私たちの結婚式とき奥様が私の母にどうやつて娘三人を嫁がせたんだつて盛んに訊いてきたそうよ」

「そう。まだ三人とも結婚してないそうだ。先生から誰か紹介してくれと頼まれたんだ。特に、長女の方は三十歳近くなるそうだから」

「働いてるんでしょ」

「うん。国家公務員をしてるって聞いたけど」

「公務員をされてるのね。いい大学を出て、安定している仕事に就いているから、どうしても結婚しなきゃつていう気持ちにならないのじゃないかな？」

「それを言うなら。お前だつて、ついこの前まで地方公務員をしてたじゃないか」

「私も三十歳に近くなつたときにはこのまま公務員を続けようつて思

つて、結婚は必ずしも望まなかつたわよ。でも、テニス仲間の金田さんが必ず来なさいつて言うものだから、小雨の降る日にコートへ行つたのよ。そうしたらそれがお父さんとのお見合いだったのね」

「実はな。大分前に教育学部だいぶの西本先生に誰か紹介してくださいつてお願いしてあつたのさ。そうしたら、三人までなら当てがあるので紹介してやるつて言つてくれてたんだ。西本先生が金田さんに声をかけて、お前がノミネートされたんだよ。きつと」

「そうなの。私は、西本先生とは面識はなかつたし」

「それで、最初に紹介してくれたのが、お前だつたんだ。今だから言うけど、後の二人には逢つてもいないからな」

「あら、そんなことがあつたなんて初耳だわ。他の女性が良かったんじゃないかしら。ほつほつほつ」

「私はそんなに気が多い方じゃないよ。白状したのだからいいだろ。それでえ、話しを戻すと、小雨が止まないのので事務室で休憩しているときにお前を見て、いい女性だつて私は一目惚ひとめぼれしたんだ」

「本当かなあ？ よく言うわね。お父さん眼が笑つてるよ。ふつふつふつ」

「結局、私も知らされないまま、西本先生が絶対に来いと言うもんだから小雨の中を今日のテニスは中止だな、と思いつつコートへ行つたんだよ。立場は同じだったわけだな。お前の電話番号を先生から教えてもらつて、初めて話をしたときは緊張したよ。はつはつはつ」

「偶然だけど、住んでる場所も近くて、それから後はトントン拍子に進んだわ。いえ、お父さんは焦つてみたいで、十分にデートすることもなかつたわ。翌年の三月に式を挙げたのだからね」

「焦るというよりも、私は三十五歳になつていたし、それに生活に疲れていたんだ。それで早く式を挙げて、一緒に住みたかつたんだよ」

「結納もお父さんが一人で用意して、実家へ来たよね」

「大学生になってから自活をしてきたので、自分のことは自分でするという姿勢だったから。それに親父は亡くなっていたし、徳島にいるお袋、兄貴や姉に来てもらうわけにもいかず、本を読んで結納の仕方を勉強したんだ」

「結納の口上も立派にしゃべっていたわよ」

「そうか。ありがとう。なん度も暗唱したけどな。ナマハゲの仮面を掛けてある畳の間でしゃべったんだ。お婆ちゃんを前にして。それから、曾祖母とお婆ちゃん、次姉夫婦と連れ立って皆で駅通りにある鰯屋へ昼食を食べに行ったんだよな。あのとき、私は仏壇の義父さんや曾祖父に挨拶したかな？ したと思うのだけど」

「お父さん、よく覚えてるね」

「結納はお金にしてくださいってお婆ちゃんに言われて、それを大学の研究室の机の引き出しにしまってあったから、その日の朝、研究室へ寄ってから、それを持って実家へ行ったんだ。昼食の後、私は車で研究室へ戻ってきて、スーツをスキーウェアに着替えてから友人と夕張のマウントレイシーへスキーに行ったんだ。車中で友人に午前中、結納を交わしてきたと教えたけど、信じてもらえなかったよ」

「車は誰が運転したの？」

「私だよ。私の車に二人のスキー板を乗せて、スベル、スベル、スベル、スベルって声を出しながら国道と山道を走ったのさ」

「結納を交わした後によくまあ遠出をしたわね。事故に遭ってたら、大変なことになってたわよ」

「若かったんだよ。勢い勢いで走って行ったんだ。ルンルン気分」

そう話してから私はベビーベッドで眼を覚ましニコニコ笑っている

長男をそおつと抱き上げ、ぎゅつと胸で抱きしめ軽く前後左右に揺すつてから、「ほんと、理ましくんは、可愛いなあ」と相好をくずし、大福餅のようなほっぺへぶちゅぶちゅとキスをした。

それを見ている女房も目尻を下げ頬を緩めて微笑んでいた。

筆者はここで筆を置く。がしかし、あれから二十三年後、私は再び同じようなへまをした。若い同僚から頼まれ、職場にいるある女性を紹介しようとしたが、その同僚は既にその女性のことをよく知っていた。女性に特別な男性がいることも知っていた。今回、私は女性と同僚の両方に「ごめんなさい」と謝った。自分には縁結びの磁力は備わっていないのだろう。自分のような世間の広くない人間は軽々しくこんなことは引き受けるべきじゃあない、と反省している。

